

稲の唄

大阪・河内長野市森本和代（在宅

水面が鏡と変わる田植えあと

背丈伸びさわさわ話す稲穂たち

水田を日干しにするは試練かな

七月下旬に水を抜くのはお米を多くつけさせるため

風渡る稲穂の波は海の音

大暑過ぎとんぼ舞い飛ぶ稲の上

稲穂花朝露に咲き陽に^ひ終いえ

稲は八月の終りのたた一日の数時間しか咲きません

稲作は毎年育つ同じ田で

水田が連作できるのは自分で土を耕しているから

青き穂も少し傾き日は移る

穂先下げ太鼓聴き入る姿かな

香り立つ実入る稲穂の熟成よ

実る時すずめ齧しのきらめきか陽は暑く風さわやかな実る
秋

刈り取りの終わりに小鳥来る今昔落穂拾て藁火焼き

あじさい咲いてよくぞここまで

梅咲きて桜便りに花菖蒲あじさい咲いてよくぞここまで

駄々こねるわが子を引いて登る道茨と思うな彼は師なり

近隣の翁が植えし八重桜命尽きても愛する人あり

おぼろげに春の色をば思い出す百花繚乱われ一人観る

憎しみを体中に受け止めて浅ましき胸これもまた我

日々変わる山あり谷を越ゆる君ともに歩むは顔見ぬわれら自由とは名ばかりの世に身をおきて生死も人にゆだねざる我死に化粧彩り映えて逝く日までリアルなる人の生きざま

